

日本人英語学習者の非母語話者英語に対する態度 ——非母語話者アクセントが話者評価に及ぼす影響

天野 修一

1. 研究背景

Lambert et al. (1960) 以来の数多くの言語態度 (language attitudes) 研究によって、ひとは他者の発話を聞くとき、発話内容からだけでなく、その人の使用する言語や方言からも話し手の印象を推測し、「知的」であるとか「洗練された」といった何らかの評価を下していることが明らかにされてきた (cf. Bradac 1990; Giles and Powesland 1975)。言語態度研究にも様々な種類があるが、研究対象となる言語の音声を実験刺激とし、それを聞いた反応を SD 法¹によって測定することで、被験者が意識下で抱いている言語に対する価値観を調査する類の研究を、特に発話評価 (speech evaluation) という。これまでの発話評価の研究で英語の非母語話者 (non-native speaker、以下 NNS と表記) は一般に、母語話者 (native speaker、以下 NS と表記) の規範から逸脱した非標準的な語形変化やアクセントを含んだ英語によって、その能力や社会的な地位を低く評価されることがわかっている。一方、対人的な魅力に関しては NS より高い評価を受ける場合もある (e.g. Ryan and Bulik 1982)。

発話評価研究の結果は「その変種の話し手への社会的認識を反映し、言語や方言それ自身の本質—論理的とか芸術的とか—とは何も関係がない。従って、ある言語変種を聞くことは一般に、関連するスピーチコミュニティに関する態度 (または偏見やステレオタイプ) を引き出す引き金や刺激として作用する」²と考えられている。例えば、Cargile and Giles (1998) の調査では、日本語アクセントの英語の話し手は NNS でありながら、社会的地位については標準アメリカ英語の話し手と比較してほぼ同等の評価を受けた。³ 調査者達によれば、日本語アクセントの英語に対するこのような評価は、被験者がアクセントから話し手が日本人であると認識したことに起因する。つまり、調査が行われた時期の日本の国際競争力への評価や、日本人は知的で勤勉であるが、控えめで慎重だと

いうアメリカにおける日本人のステレオタイプを反映したものだという。

NNS に対する発話評価の研究はこれまで、NS による NNS の英語話者に対する評価の研究が主流であった。しかし、英語は今や国際語と称される存在であり、NNS としての英語話者数は、少なく見積もっても、NS としての英語話者数に匹敵するまでになった (Crystal 1997: 60-61)。英語を用いた国際コミュニケーションに際して、NNS の存在はもはや無視できない。日野 (2001: 277) の述べるように、「自らの英語を含め、諸英語変種に対する偏見のない公平な態度は、国際英語によるコミュニケーションを成功させるための基本的な要素」だとするならば、NNS による NNS 英語に対する評価が如何なるものであるかも検証する必要があるだろう。以上のことから、本論では英語の NNS である日本人を被験者として、NNS 英語に対する態度の調査を行う。

2. 先行研究

すでに述べたように、現在のところ NS を被験者とする研究が圧倒的に多い。しかし、NNS 英語を含めた英語の諸変種に対する日本人の言語態度の研究も、少数ではあるが行われている。Matsuda (2000) は 1 ヶ月に及ぶ高校での参与観察とインタビューを通じて、日本人高校生の英語変種に対する態度を調査した。彼女によれば、日本人高校生たちは、英語の所有権 (ownership) はアメリカ英語やイギリス英語の話し手にあると考え、NNS 英語に対して否定的とはいえないまでも決して肯定的ではなく、興味や関心の希薄さは明白だという。また、彼らはすべての NNS 英語を同等に捉えているわけではない。例えば、彼らは日本語アクセントの英語よりも、ドイツ語アクセントの英語の方に肯定的なイメージを持っているという (152)。しかし、Matsuda (2000) の研究手法は参与観察とインタビューであったため、実際に日本人やドイツ人の話す英語を聞かせたうえでの発話評価研究ではなかった。

Matsuura et al. (1994) は日本語を L1 とし、英語を L2 として学習する大学生を対象に、Verbal guise technique⁴ (以下 VGT と表記) を用いて、NS (アメリカ出身) と NNS (アジア出身) の話し手に対する評価を調査した。その結果、被験者は全般的に NNS より NS を好意的に評価していることが明らかになった。また調査者達は、NS 及び NNS の英語に対する評価と被験者の英語力には相関がないと報告している。Chiba et al. (1995) は同じく日本語を L1、英語を L2 とする被験者を対象として追調査を行い、前回の調査と同様、被験者は概ね NS

の方をより好意的に評価したとの結果を得た。しかし、両研究の分析の中心は NS に対する評価と NNS に対する評価の比較であったように思われる。そのため、NNS 間の評価の差についてはあまり言及されていない。

また、言語変種に対する発話評価を研究するうえで注意しなければならないのは、彼らが正確に話し手の所属集団（民族、社会階層、国籍など）を特定したうえで評価しているとは限らないという点である。そのため、聞き取ったアクセントから被験者に話し手の所属集団を推測させ、その正答率を測定するというタスクがしばしば用いられる（e.g. Jarvella et al. 2001）。Chiba et al. (1995) も被験者にそれぞれのアクセントを手掛りに話し手の国籍を推測するように求めている。Chiba et al. (1995) では、被験者はアクセントが NS のものであるか NNS のものであるかは概ね特定可能であったが、国籍はそれほど正確に特定されていなかった。但し、聞き取ったアクセントが NS のものであると判断した被験者は、その NS を好意的に評価する傾向にあることは確認されている。

しかし、Ryan (1983: 150) が指摘するように、単に聞き手に話し手の出身地を特定させ、その正否を問題とするだけでは、いくつかの課題を見落とすことになる。単なる正否よりも、聞き手が話し手の所属集団を推測し特定するその過程に注意することが重要である。つまり、被験者はどの程度まで話し手の所属集団を特定できているのか、そもそも全く特定できていないのか。仮に特定できていたとしても、NNS であることだけなのか、アジア人であることまで特定しているのか、それとも日本人であることまでなのかなどを確かめなくては、その実験における被験者の評価が発話の非母語性（non-nativeness）に対するものなのか、ある特定の NNS のアクセントに対して下されたものなのか明確にならない。従って本調査では、被験者が話し手の所属集団を特定する過程を以下の3段階に区分したタスクを用いて調査した。

- (1) 被験者は話し手が NS であるか、NNS（つまり、学習者）であるかを区別しているか
- (2) 被験者は話し手の出身地域（ヨーロッパ、アジア etc）を特定しているか
- (3) 被験者は話し手の出身国を特定しているか

実験刺激には、NS と日本人に加えて、中国人、ドイツ人の発話を採用し、これらの発話に対する被験者の評価を比較分析する。実際に NS や日本人、そ

4 天野 修一

の他の NNS の英語に触れたとき、Matsuda (2000) が指摘したように日本語アクセントの英語は日本人から低評価を受けるのだろうか。また Chiba et al. (1995) と同様に、被験者が話し手の所属集団を明確に区別できないようであれば、NNS の発話の間では評価に大きな差は生じないかもしれない。以上のことから、本調査のリサーチクエスションは以下のように要約できる。

RQ1 日本人被験者による評価は、NS の発話と NNS の発話ではどのように異なるか？

RQ2 日本人被験者による NNS の発話への評価は、話し手の所属集団によって異なるか？

また、先行研究を参考に以下の仮説を設け、これらを検証する。

仮説 1 NS の発話への評価は、全ての NNS の発話への評価よりも高い

仮説 2 NNS の発話への評価には、話し手間で差がある

仮説 3 日本人と認識された割合の高い NNS は低い評価を受ける

3. 調査

3. 1. 被験者

愛知県または岐阜県に在住する中学生、高校生、大学の学部生、大学院生、社会人、合計 45 名（男性 23 名、女性 22 名）。⁵

3. 2. 調査方法

本論では VGT を用いた。測定のために用いた質問紙は 4 部構成（質問 A、B、C、D）である。但し、質問 D は本稿との直接的な関連が希薄だったため、割愛する。質問 A では被験者の年齢、性別、英語学習歴、日常生活における英語使用の頻度を理解するための質問をした。この部分はまた質問紙への自然導入の意味合いも持っている。

質問 B では MD に録音された 5 種の発話を聞き、その話し手に対する評価を SD 法の形式でデザインされた尺度によって回答した。尺度は 7 ポイントとし、数値が高いほど好意的な評価と判断できるようデザインした。Matsuura et al. (1994) や Chiba et al. (1995) では、その調査で用いられた尺度から判断する

と、話し手の能力や社会的地位に対する評価の分析が調査の中心となっていたように思われる。それに対して本論では、それぞれの発話に対する評価をより詳細に検討するため、Zahn and Hopper (1985) に従い、発話の評価を3つの次元に区分した。具体的には、地位次元（知的な、社会的地位が高い など）、魅力次元（友好的な、信頼できる など）、活動性次元（活動的な、野心的な など）という3つの評価次元を採用した。⁶ 前述のように、NNS 英語は、地位次元では低い評価を受けても、魅力次元では高い評価を受ける場合があるためである。実際の質問紙にはそれぞれの評価次元に適する形容詞を4つずつ、ランダムに配置した。

質問 C では前述のタスクに答えた。いったん質問 C を回答し始めたら、質問 B での回答を書き直すことを禁じた。出身地域のタスクでは、世界を便宜上 6 つの地域に分け、記号による回答を求めた。出身国のタスクでは、先に 6 つに分けた地域 1 つにつき 5 つの国名を割り当て、記号による回答を求めた。つまり、被験者は全 30 ヶ国の中から話し手の出身国を選んで回答するという方法をとった。

3. 3. 話し手

実験刺激となる発話は、NS（イギリス人 1 名）、日本人（2 名）、中国人（1 名）、ドイツ人（1 名）の 5 種である。録音は音声学の実験に用いられる施設を利用して行った。録音内容は高校英語教科書の一節の朗読である。⁷ 録音に入る前に、話し手が文章に慣れるまで十分な時間をとった。朗読時間はできるだけ一定（36-38 秒）になるよう調節したが、読み上げの速さ以外には読み方についての特別な指示は与えていない。この文章には NNS 英語に見られる特徴的な構造の文や語彙は含まれておらず、すべての話者が同じ文章を朗読した。従って、5 種の発話の主だった違いはアクセントのみである。⁸ 話し手は全員 20 代後半から 30 代半ばの男性である。日本人の発話は意図的に 2 種類の発話を用意した。片方の発話は音声学を専門とする大学院生によるもので、二重母音や強勢の位置などに注意が払われている。もう一方の発話は、別の大学院生による日本語アクセントの強い英語である。中国人、ドイツ人の発話には若干であるが、それぞれの母語の影響がある。⁹ 実際には 8 名の話し手による発話を録音したが、調査の際には母語アクセントの程度や声質等を考慮し、適当と思われる 5 名の発話を選出して使用することにした。

3. 4. 手順

調査は2004年8月から9月に数回に分けて行われた。調査開始後、まず質問Aへの回答を求めた。次に質問Bでは、回答を書き入れる前に5種の発話を途中でテープを止めることなく連続で放送し、被験者が1度全ての発話に触れるようにした。2度目の放送では、1人の発話が終了する毎に1分間の間隔を設け、その間に被験者は回答を記入した。5種の音声が発送された順番は、ヨーロッパ人、日本人、アジア人、日本人、NSである。NSを最後に配置したのはNSの後に聞かれることで、次のNNSだけが不当に低い評価を受けるのを避けるためである。全ての被験者が質問Bに通り返答し終わったことを確認した後、いったん質問Cの回答に入ったら、質問Bの回答を書き直すことはできないことを説明し、必要があれば回答を再度確認させた。質問Cでも同じ順番、同じ間隔で放送した。

4. 結果と考察

4. 1. 被験者

ここで質問紙から明らかになった被験者の情報を提示する。まず、被験者を外国語として英語を学習したものに限定するため、1年以上連続して英語圏に滞在した経験を持つもの(全45名中1名)を分析から除外した。平均年齢は17.66歳(SD 5.82)。¹⁰ また、彼らがNSやNNSと英語によって日常的にコミュニケーションをとる機会は極めて限定的といえる(NS: 平均 1.84、SD 1.24 NNS: 平均 1.75、SD 1.20)。¹¹ 75.00%がアメリカ英語を学習モデルとして英語を学んでいると考えているが、一方で自らの話す英語をアメリカ英語と考えるものは50.00%と減少し、その分、日本語アクセントの英語を話すと考えられるもの割合が高くなっている(38.64%)。アメリカ英語とその他のNS英語変種を合わせると、79.55%の被験者がNS英語をモデルとして英語を学習していると回答した。

4. 2. 話し手の所属集団

表1は話し手の所属集団を特定するタスクの結果である。NSという欄は被験者が話し手をNSであると認識した割合を、出身国という欄は出身国を正確に特定できた割合を示している。¹²

最も高い割合でNSであると認識されたのは、実際にNSであるS5(77.27%)

であった。しかし、S5 の出身国を正確に特定した割合は予想外に低い(15.91%)。実際は NNS である残りの話し手達の中で、最も高い割合で NS であると判断されたのは S3 (54.55%) で、実に 2 人に 1 人以上の被験者が彼を NS であると誤認したことになる。また S1 と S2 についても、出身国を正確に特定した割合は低い。これらの結果をみると、NNS であり、かつ英語によるコミュニケーションの機会が限定的な今回の被験者にとっては、英語のアクセントは話し手が特定集団に所属していることを示すマーカーとしての役割を果たしていないように思われる。

しかし、視点を変えてみると、S4 を NS と判断したものは 1 人 (2.27%) しかおらず、ほぼ全ての被験者が S4 は NNS であることに気づいていた。また同時に、7 割近い被験者が彼は日本人であると認識した (68.18%)。この 2 点は興味深い。なぜなら、これらは NNS であっても、ある種の特徴を備えた発話を特定集団と結びつけることが可能であることを示す結果だと考えられるからである。S4 は日本語アクセントが強いため、被験者達が教室で英語を学習する際に、頻繁に耳にするであろう自分以外の学習者達の発話と類似した部分があったのかもしれない。但し、今回の被験者たちについていえば、その能力は限定的なものだと解釈するべきだろう。なぜなら、前述のように他の話し手たちの出身国を正確に特定した割合は全体に低く、特に S4 と同様に日本人である S2 が日本人であることに気づいた被験者は 2 割にも満たないためである。

表1 被験者による話し手の所属集団の特定

	出身	年齢	発話時間	NS	出身国
Speaker 1 (S1)	ドイツ	30代	38秒	43.18%	9.09%
Speaker 2 (S2)	日本	30代	37秒	22.73%	15.91%
Speaker 3 (S3)	中国	30代	36秒	54.55%	4.55%
Speaker 4 (S4)	日本	20代	36秒	2.27%	68.18%
Speaker 5 (S5)	イギリス	20代	36秒	77.27%	15.91%

表2 被験者の推定した話し手の出身地域

	ヨーロッパ	アジア	北中米	南米	アフリカ	オセアニア
Speaker 1	31.82%	18.18%	15.91%	6.82%	13.64%	13.64%
Speaker 2	2.27%	40.90%	25.00%	20.45%	9.09%	2.27%
Speaker 3	40.90%	13.64%	18.18%	4.55%	11.36%	11.36%
Speaker 4	4.55%	79.55%	2.27%	6.82%	6.82%	0%
Speaker 5	25.00%	4.55%	38.64%	2.27%	11.36%	18.18%

表 2 は被験者の推定した話し手の出身地域を表している。色の変っている欄は話し手それぞれの実際の出身地域を示している。S4 は日本人であると認識された割合が高かったため、出身地域に関しても高い正答率 (79.55%) となっている。反対に最も低い正答率は S3 (13.64%) である。S3 はヨーロッパ出身であると誤認された割合が高く (40.90%)、その割合は実際にヨーロッパ出身である S1 (31.82%) や S5 (25.00%) を上回るものであった。イギリス出身の NS である S5 はアメリカ出身と誤認されるケースが多く、このため実際の出身地域であるヨーロッパよりも北中米が 38.64% と高くなっている。¹³

4. 3. 話し手に対する評価

調査の結果得られたそれぞれの話者に対する評価は表 3 の通りである。¹⁴ 項目 1-4 は地位次元、項目 5-8 は魅力次元、項目 9-12 は活動性次元に関する項目である。それぞれの次元の合計値は項目 13-15 に示した。詳細は以下で論ずるが、一見して日本人被験者による NNS の英語話者への評価は、話し手間で差が生じていることがわかり、仮説 2 は指示されたといえよう。また、それぞれの次元に対する一元配置分散分析の結果、地位次元と活動性次元では話し手間の評価に有意差があったため、表 4 にまとめて表示した。表中の ns は有意差がなかったことを示し、>は横軸、<は縦軸の話し手の方が有意に高い評価を受けていたことを表している。有意水準は 5% である。

地位次元で最も高い評価を受けたのは NS の S5 であった。分散分析の結果、S5 は S4 ($p = .000$) との間に有意差が見られた。また S4 は S5 だけでなく、S1 ($p = .019$)、S3 ($p = .000$) との間にも有意差が見られた。79.55% の被験者が NS を規範として英語を学んでいるという条件下で、S5 が 77.27% の割合で NS の発話であると推定されたということは、S5 の発話が規範的なアクセントの発話であるとみなされたということを意味している。その S5 が地位次元で高い評価を受けたことは、地位次元の評価には言語の規範性が影響するという Bradac (1990) の主張と一致する。

S5 に次いで高い評価を受けたのは S3 である。S3 は NS であると判断された割合も S5 に次いで 2 番目だったことを考慮すると、2 番目に規範性の高い S3 が 2 番目に高い評価を受けたと考えられる。他の話し手についても、NS であると判断された割合の高い順と、地位次元での評定順は全く同じである。仮説 1 では NS の発話は NNS の発話よりも高評価を受けると仮定したが、このことか

ら、それが実際は NNS の発話であっても、「NS らしいアクセント」の英語は高い能力や社会的地位と結びつけられると解釈できる。つまり、日本人の間では「NS らしいアクセント」の英語が高い威信 (prestige) を保持していることがわかる。

表3 話し手に対する評価

項目	Speaker1	Speaker2	Speaker3	Speaker4	Speaker5
1 知的な	4.43 (1.25)	4.09 (1.24)	4.93 (1.30)	3.84 (1.20)	4.98 (1.32)
2 能力が高い	4.34 (1.27)	4.07 (1.44)	4.73 (1.35)	3.48 (1.23)	4.93 (1.39)
3 社会的地位が高い	4.09 (1.31)	4.43 (1.42)	4.25 (1.28)	3.98 (1.41)	4.70 (1.23)
4 洗練された	4.59 (1.50)	4.20 (1.49)	5.02 (1.42)	3.41 (1.47)	4.64 (1.56)
5 親切的な	4.32 (1.39)	4.80 (1.23)	4.48 (1.25)	3.95 (1.33)	4.41 (1.30)
6 真面目な	4.73 (1.34)	4.70 (1.11)	4.98 (1.30)	4.64 (1.18)	4.59 (1.37)
7 社交的な	3.61 (1.17)	4.64 (1.20)	3.34 (1.33)	4.50 (1.19)	3.82 (1.37)
8 信頼できる	3.75 (1.24)	4.43 (1.32)	4.02 (1.30)	3.93 (1.17)	4.18 (1.24)
9 活動的な	3.25 (0.94)	4.95 (1.12)	2.91 (1.16)	4.41 (1.09)	3.70 (1.19)
10 野心的な	3.64 (1.30)	4.18 (1.47)	3.41 (1.51)	4.00 (1.18)	3.98 (1.36)
11 エネルギッシュな	3.07 (1.19)	5.00 (1.31)	2.80 (1.15)	4.36 (1.10)	3.52 (1.28)
12 自信のある	3.45 (1.41)	4.86 (1.30)	3.59 (1.69)	4.57 (1.30)	4.18 (1.40)
13 地位次元合計	17.45 (3.78)	16.80 (4.73)	18.93 (3.93)	14.70 (3.58)	19.25 (4.41)
14 魅力次元合計	16.41 (3.58)	18.57 (3.25)	16.82 (3.70)	17.02 (3.02)	17.00 (4.06)
15 活動性次元合計	13.41 (3.12)	19.00 (3.49)	12.70 (4.34)	17.34 (3.48)	15.39 (3.62)

表4 一元配置分散分析の結果

地位次元

	S1	S2	S3	S4	S5
S1	-	ns	ns	>	ns
S2		-	ns	ns	ns
S3			-	>	ns
S4				-	<
S5					-

活動性次元

	S1	S2	S3	S4	S5
S1	-	<	ns	<	ns
S2		-	>	ns	>
S3			-	<	<
S4				-	ns
S5					-

魅力次元では話し手間の評価に有意差はなかった。非標準的なアクセントの話し手は魅力次元について好意的に評価される場合があることはすでに述べたが、特に内集団の被験者からは高い評価を受けることが多い。すなわち、本調査の場合であれば、日本人の被験者は日本人の話し手を魅力次元で高く評価すると予測できる。このことは非標準的な言語変種が、話し手がある特定の言語変種を話す集団に属しているという帰属意識を強化する機能を果たすため、と

解釈されている (Ryan, Hewstone and Giles 1984)。しかし、本調査において、S4 は日本人であると高い割合 (68.18%) で認識されいながら、魅力次元で特別に高い評価を受けることはなかった。従って、少なくとも今回の被験者たちにとって日本語アクセントの英語は、そのような機能を果たすものとはいえない。この点で日本語アクセントの英語は、すでに社会変種の存在までもが確認されているシンガポール英語などの第 2 言語としての英語とは大きく異なる。¹⁵

活動性次元で高い評価を受けたのは S2、S4 という日本人の話し手であった。低い評価を受けたのは S1、S3 である。S1 も S3 も日本人の話し手らとの間には有意差がある (S2-S1: $p = .000$, S2-S3: $p = .000$, S4-S1: $p = .000$, S4-S3: $p = .000$)。活動性次元の評価に影響を与える要因については、先行研究が少なく、あまりよくわかっていないが、日本人の話し手が高い評価を受けている点は注目に値する。仮説 3 で日本人と認識された割合の高い NNS は低い評価を受けると推定したが、活動性については高評価であった。しかし前述のように、S2 は S4 と異なり、実際は日本人であるが日本人であると認識された割合は低い (15.56%) ことに注意すべきである。

それではなぜ、S2 と S4 は共に活動性次元で高い評価を受けたのだろうか。表 2 を見ると、S2 と S4 は日本人であるということだけでなく、ヨーロッパ出身であると認識された割合が低く (S2: 2.27%、S4: 4.55%)、アジア出身であると認識された割合が高い (S2: 40.90%、S4: 79.55%) という点も共通している。また、低い評価を受けた S1 と S3 は、他の話し手に比べ、ヨーロッパ出身であると認識された割合が高い (S1: 31.82%、S3: 40.90%)。これらを考慮すると、活動性次元では、アジア出身であると認識された話し手は高い評価を受け、ヨーロッパ出身であると認識された話し手は低い評価を受けるという傾向を読みとることができる。但し、本調査で収集したデータからは、日本人がアジアやヨーロッパの人々に対してどのようなステレオタイプを持つのか、それらのステレオタイプは今回の結果と結びつくものなのか、という点についてこれ以上考察することができないため、軽々に一般化するべきではないだろう。今後このデータから読みとられた傾向をより詳細に検証すべく、追調査を行いたい。

5. 課題と結論

本調査の結果から得られた発見は主に以下の 3 点である。まず、英語の NNS である日本人被験者も、ある種の特徴を備えた発話を特定集団と結びつけるこ

とが可能であると思われる。但し、その能力は極めて限定的であった。この能力が高い被験者は、NS と同様に話し手の所属集団によって話し手への評価が左右される傾向が強まるだろうと予測できる。今後、この能力を高める要因について調査するなどして、さらに理解を深めたい。

2つ目に、日本人被験者の間では、発話の NS らしさが話し手の地位次元の評価に影響を与えることがわかった。このことから NNS 英語の正当性が主張される現在でも、¹⁶ やはり日本人の間では依然として「NS らしいアクセント」の英語が高い威信を保っていることがわかる。日本人の学習者が主に仕事上の必要性で英語を学習していることを考慮すると、彼らは地位次元で高い評価を受ける（と彼ら自身が評価する）変種、つまり NS 英語を話そうと努める傾向はしばらく続くだろう。

3つ目に、NNS である日本人は全ての NNS 英語を同等に捉えているのではなく、NS と同様、何らかの要因から異なった評価を下しており、話し手の所属集団に対するステレオタイプもその要因の1つであると考えられる。例えば活動性次元では、アジア出身であると認識された話し手は高い評価を受け、ヨーロッパ出身であると認識された話し手は低い評価を受けるという傾向が見られた。但し、今回のデータからは、このような傾向が認められた要因を十分に説明することは困難であったため、今後、追調査を行っていく必要がある。

また、Matsuura et al. (1994) の報告とは相対するが、被験者が日本のような EFL (English as a foreign language) の国で英語を外国語として学ぶ学習者である以上、学習者の英語力と英語変種に対する態度が全くの無関係であるとは考えにくいのではないか。今後、この点についても、より大規模の被験者を対象として調査を行っていききたい。

注釈

- 1 SD 法とは、例えば以下のように対になっている形容詞（修飾語）をスケールの両端に配置し、被験者の心理を問う技法。詳細は Osgood (1964) 参照。
親しみにくい 1 2 3 4 5 6 7 親しみやすい
- 2 Edwards (1999: 102) より引用、引用部分の和訳は筆者による。
- 3 但し、これは日本語アクセントが適度な場合である。日本語アクセントが過度に強い場合は他の NNS アクセントと同様に評価は低くなっていた。
- 4 VGT は発話評価研究の代表的な手法である。具体的には、異なる言語や言語変種の話し手の発話を録音したものを被験者に聞かせ、被験者はその音声のみを手掛りに話者に対する印象を SD 法形式のアンケートに回答するという手法。詳細

- は Cooper (1975) 参照。
- 5 データ収集に際し、名古屋市の中部教育システムズ、岐阜市の高木塾の方々に協力頂いた。
 - 6 Zahn and Hopper (1985) は 3 つの評価次元の相互関係にも言及しているが、ここでは扱わない。
 - 7 教育出版『One World English Course I』(P51、L1-15、全 74 words) を用いた。実験刺激として教科書のような既定文の朗読を用いることには批判もある (Bradac 1990: 389)。音声の実験色を帯びることを避けるため、より自然のままの音声を採用して用いるべきだというのが批判の中心である。しかし本調査の被験者は、日常生活で英語を耳にする機会が極めて限定的である。従って、彼らにとって、教科書の朗読を聞くことは自然のままの会話を聞くことよりも特別に不自然だとはいえないと判断した。
 - 8 ここではロメイン (1997: 22) に従い、アクセントを「ある変種を発音するそのしかた」の違いと定義する。
 - 9 本論で実験刺激として用いた NNS の音声サンプルは、すべて EFL の国々の出身者の発話である (McArthur, 1996: 13) ため、ESL (English as a second language) の国であるシンガポールのシンガポール英語のように、語彙、統語構造、音韻、その他の点で体系的な変種とはいえない。従って、例えば日本語アクセントの英語は、本来は「ある日本人によって話された英語」のように表現するのがより適切だろう。しかし、理解のし易さなどを考慮して日本語アクセントの英語と表現している。
 - 10 SD は標準偏差を表す。
 - 11 NS 及び NNS と、英語でコミュニケーションをとる機会がどの程度であるか問いかけ、(1.まったくない-5.ほぼ毎日) という尺度で回答を求めた。
 - 12 2 人いる日本人の話し手のうち、音声学専攻の大学院生による発話は S2、日本語アクセントの強い発話は S4 である。
 - 13 被験者は、発話の如何なる要素に基づいて、話し手の所属集団を特定しているのか、という問題は重要であるが、ここでは扱わず、今後の課題とする。
 - 14 表の中の () の数値は標準偏差を示している。
 - 15 シンガポールにおけるシンガポール英語の機能については大原 (2002) に詳しい。
 - 16 NNS 英語の正当性をめぐる議論は、例えば本名 (1990) に詳しい。

参考文献

- Bradac, J. J. (1990) Language attitudes and impression formation. In Giles, H. and Robinson, W. P. (eds.) *Handbook of Language and Social Psychology*. Chichester : John Wiley & Sons, 387-412.
- Cargile, A. C. and Giles, H. (1998) Language attitudes toward varieties of English: An American-Japanese context. *Journal of Applied Communication Research* 26, 338-356.
- Chiba, R., Matsuura, H. and Yamamoto, A. (1995) Japanese attitude toward English accents.

- World Englishes* 14, 77-86.
- Cooper, R. L. (1975) Introduction. *International Journal of the Sociology of Language* 3, 5-9.
- Crystal, David. (1997) *English as a Global Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Edwards, J. (1999) Refining our understanding of language attitudes. *Journal of Language and Social Psychology* 18, 101-10.
- Giles, H. and Powesland, P. F. (1975) *Speech Style and Social Evaluation*. London: Academic Press.
- 日野信行 (2001) 「国際英語の多様性と英語教育」 『言語文化研究 27』 大阪大学言語文化部 言語文化研究科 261-283 頁
- 本名信行 (編) (1990) 『アジアの英語』 くろしお出版
- Jarvella, R.J., Bang, E., Jakobsen, A. L. and Mees, I. M. (2001) Of mouths and men: non-native listeners' identification and evaluation of varieties of English. *International Journal of Applied Linguistics* 11, 37-56.
- Lambert, W. E., Hudgson, R. C., Gardner, R. C. and Fillenbaum, S. (1960) Evaluational reactions to spoken languages. *Journal of Abnormal and Social Psychology* 60, 44-51.
- McArthur, T. (1996) English in the world and in Europe. *English Language in Europe*. Hartmann, R. (ed.) Oxford: Intellect, 3-15.
- Matsuda, A. (2000) *Japanese Attitudes toward English: A Case Study of High School Students*. Unpublished PhD dissertation, Purdue University.
- Matsuura, H., Chiba, R. and Yamamoto, A. (1994) Japanese college students' attitudes towards non-native varieties of English. In *Evaluating Language*. Graddol, D. and Swann, J. (eds.) Clevedon: Multilingual Matters LTD, 52-61.
- 大原始子 (2002) 『改訂版 シンガポール社会の言葉と社会: 多言語社会における言語政策』 三元社
- Osgood, C. E. (1964) Semantic Differential technique in the comparative study of culture. *American Anthropologist* 66, 171-200.
- ロメイン, スーザン (1997) 『社会の中の言語: 現代社会言語学入門』 土田滋・高橋留美 (訳) 三省堂
- Ryan, E. B. (1983) Social psychological mechanisms underlying native speaker evaluations of non-native speech. *Studies in Second Language Acquisition* 5, 148-159.
- Ryan, E. B. and Bulik, C. (1982) Evaluations of middle class and lower class speakers of standard American and German-accented English. *Journal of Language and Social Psychology* 1, 51-61.
- Ryan, E. B., Hewstone, M. and Giles, H. (1984) Language and intergroup attitudes. In *Attitudinal Judgment*. Eiser, J. R. (ed.) New York: Springer-Verlag, 135-158.
- Zahn, C. J. and Hopper, R. (1985) Measuring language attitudes: The speech evaluation instrument. *Journal of Language and Social Psychology* 4, 113-123.